

「嫌われ政次(まつく)の一生」 ～ 本懐を貫き、次の手を打つ ～



NHK大河ドラマ「女城主 直虎」の一昨日の放送は壮絶なラストシーンでした。後半は全く身動きできず、最期は息も止まり、涙も出ないほど固まってしま

いました。

視聴率はあまり高くないそうですが、皆さんは見ておられますか。私は完全にはまっています。

本当はお家の安泰を誰よりも案じていたが、ずっと嫌われ役を務めてきた高橋一生演じる小野政次という家来が、策略にはまって磔にされる場面で、柴咲コウ演じる主人公の井伊直虎自らが槍を持って突き刺すというシーンでした。

見事に本懐を遂げた政次の姿に心を打たれるとともに、直虎の気持ちを押し量ると、言葉になりませんでした。

史実とはかなり違う脚本のようですが、このような壮絶で、悲しく、美しい最期は初めてです。脚本の素晴らしさとともに、柴咲コウと高橋一生の渾身の演技には参り



ました。特に私は、途中から高橋一生のファンとなり、放送後に一部で話題となっている「政次ロス」状態です。

小野政次という武士は、幕末に日米修好通商条約を

調印しましたが、桜田門外の変で暗殺された彦根藩主井伊直弼が有名な、井伊家の戦国時代の筆頭家老でした。

史実では、政次は井伊家に乗っ取ろうとして最終的には斬首された悪人として扱われていますが、この大河ドラマでは、本心ではなく憎まれ役に徹してきたという設定になっています。

史実がどうであれ、ドラマでは、井伊家のためという政次の本懐が、静かにしかし力強く伝わってきました。高橋一生さんは、政次役を演ずるに当たって能面を参考にしたそうで、押さえ気味の演技により、逆に見る側自身がその本懐を強く感じ取るような演技でした。

私は、今回の放送で用いられたこの「本懐」という言葉に強く心を打たれました。「男の本懐」という言葉もあります。これは、個人的な希望の実現には使わず、社会的な意義があり、たとえ命に替えても実現させることに大きな意味がある場合に使われる言葉だそうです。

命に替えてもとはややオーバーですが、これからの時代を生きる良城小の子どもたちのために、吉敷だからこそその教育こそが私の「本懐」であると、改めて今、強く感じています。

また、放送では、もう一つ印象的なシーンがありました。政次が直虎に最後に渡した白い碁石です。ドラマでは囲碁は象徴的なシーンとして度々登場します。今回のシーンでは、直虎は「次の手を打てということなのでしょう。」とつぶやいています。



この「次の手」という言葉も良城にとって大切な言葉です。先生方によってこれまでも十分な手を打ってきている本校ですが、それでもまだ「次の手」はあるはずです。不断の次の手。私も打っていきたく、直虎が握ったあの白い碁石を思い出しながら考えています。

私にとって、今回の放送はこの夏休みの最も強烈な研修となりました。皆さん方も、本校の子どもたちのために、自分だからこそその「本懐」を貫き、そして「次の手」を打っていきましょう。